

# 本所両国

芥川龍之介

青空文庫



## 大溝

僕は本所界隈<sup>かいわい</sup>のことをスケツチしろという社命を受け、同じ社の〇君と一しょに久振りに本所へ出かけて行つた。今その印象記を書くのに当り、本所両国と題したのは或は意味を成していいかも知れない。しかしながら両国は本所区のうちにあるものの、本所以外の土地の空氣も漂つていることは確かである。そこで〇君とも相談の上、ちょっと電車の方向板じみた本所両国という題を用いたことにした。――

僕は生れてから二十歳頃までずっと本所に住んでいた者である。

明治二、三十年代の本所は今日のような工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的多勢住んでいた町である。従つて何処を歩いて見ても、日本橋や京橋のように大商店の並んだ往来などはなかつた。若しその中に少しでもにぎやかな通りを求めるにすれば、それは僅かに両国から亀沢町に至る元町通りか、或は二の橋から亀沢町に至る二つ目通り位なものだつたであろう。勿論その外に石原通りや法恩寺橋通りにも低い瓦屋根の商店は軒を並べていたのに違ひない。しかし広い「お竹倉」をはじめ、「伊達様」「津軽様」などという大名屋敷はまだ確かに本所の上へ封建時代の影を投げかけていた。⋮⋮

殊に僕の住んでいたのは「お竹倉」に近い小泉町である。「お

「竹倉」は僕の中学時代にもう両国停車場や陸軍被服廠<sup>ひふくしょう</sup>に変つてしまつた。しかし僕の小学時代にはまだ「大溝<sup>おおどぶ</sup>」にかこまれた、雑木林や竹藪の多い封建時代の「お竹倉」だつた。「大溝」とはその名の示す通り少くとも一間半あまりの溝のことである。この溝は僕の知つていた頃にはもう黒い泥水をどろりと淀ませているばかりだつた。（僕はそこへ金魚にやるぼうふらをすくいに行つたことをきのうのように覚えている。）しかし「御維新」以前には溝よりも堀に近かつたのであろう。僕の叔父は十何歳かの時に年にも似合わない大小を差し、この溝の前にしゃがんだまま、長い釣竿をのばしていた。すると誰か叔父の刀にびしりと鞘<sup>さやあ</sup>当てをしかけた者があつた。叔父は勿論むつとして肩越しに相手を振返

つてみた。僕の一家一族の内にもこの叔父程負けぬ気の強かつた者はない。こういう叔父はこの時にも相手によつて売られた喧嘩しゆざやを買う位の勇氣は持つていたであろう。が、相手は誰かと思うと、朱しゆ鞄ざやの大小をかんぬき差しに差した身の丈拔群たけの侍さむらいだつた。しかも誰にも恐れられていた「新徵組」の一人に違たがいなかつた。かれは叔父を尻目にかけながら、にやにや笑つて歩いていた。叔父はかれを一目見たぎり、二度と長い釣竿の先から目をあげずにいたとかいうことである。……

僕は小学時代にも「大溝」のそばを通る度たびにこの叔父の話を思い出した。叔父は「御維新」以前には新刀無念流の剣客だつた。叔父が安房上総へ武者修行に出かけ、二刀流の剣客と試合をし

た話も矢張り僕を喜ばせたものである。）それから「御維新」前後には彰義隊に加わる志を持つていた。最後に僕の知っている頃には年をとつた猫背の測量技師だった。「大溝」は今日の本所にはない。叔父もまた大正の末年に食道癌を病んで死んでしまつた。本所の印象記の一節にこういうことを加えるのは或は私事に及び過ぎるのであろう。しかし僕は〇君と一緒に両国橋を渡りながら大川の向うに立ち並んだ無数のバラツクを眺めた時には実際烈しい流転の相に驚かない訳には行かなかつた。僕の「大溝」を思い出したり、その又「大溝」に釣をしていた叔父を思い出したりすることも、必ずしも偶然ではないのである。

## 両国

両国の鉄橋は震災前と変らないといつても差支えない。ただ鉄の欄干の一部はみすぼらしい木造に変つていた。この鉄橋の出来たのはまだ僕の小学時代である。しかし櫛形の鉄橋には懐古の情も起つて来ない。僕は昔の両国橋に——狭い木造の両国橋にいまだに愛惜を感じている。それは僕の記憶によれば、今日よりも下流にかかっていた。僕は時々この橋を渡り、浪の荒い「百本杭」や蘆の茂つた中洲を眺めたりした。中洲に茂つた蘆は勿論、「百本杭」も今は残つてない。「百本杭」はその名の示す通り、河岸に近い水の中に何本も立つていた乱杭である。昔の芝居は

殺し場などに多田の薬師の石切場と一しょに度々この人通りの少ない「百本杭」の河岸を使っていた。僕は夜は「百本杭」の河岸を歩いたかどうかは覚えていない。が朝は何度もそこに群がる釣師の連中を眺めに行つた。〇君は僕のこういうのを聞き、大川でも魚のつれたことに多少の驚嘆をもらしていた。一度も釣竿を持ったことのない僕は「百歩杭」でつれた魚の何と何だつたかを知つていない。しかし或夏の夜明けにこの河岸へ出かけて見ると、いつも多い釣師の連中は一人もそこに来ていなかつた。その代りに杭の間には坊主頭の土左衛門が一人うつむけに浪にゆすられていた。……

両国橋の袂たもとにある表忠碑も昔に変らなかつた。表忠碑を書いた

のは日露役の陸軍総司令官大山巖公爵である。日露役のはじまつたのは僕の中学へはいり立てだつた。明治二十五年に生れた僕は勿論日清役の事を覚えていない。しかし北清事変の時には太平という広小路（両国）の絵草紙屋へ行き、石版刷の戦争の絵を時々一枚ずつ買ったものである。それ等の絵には義和団の匪徒やイギリス兵などは斃たおれていても、日本兵は一人も、斃たおれていなかつた。僕はもうその時にも、矢張り日本兵も一人位は死んでいるのに違いないと思つたりした。しかし日露役の起つた時には徹頭徹尾ロシア位悪い国はないと信じていた。僕のリアリズムは年と共に発達する訳には行かなかつたのであろう。もつともそれは僕の知人なども出征していたためもあるかも知れない。この知人は南山の

戦いに鉄条網にかかつて戦死してしまつた。鉄条網という言葉は今日では誰も知らない者はない。けれども日露役の起つた時には全然在来の辞書にない、新しい言葉の一つだつたのである。僕は大きい表忠碑を眺め、今更のように二十年前の日本を考えずにはいられなかつた。同時に又ちよつと表忠碑にも時代錯誤に近いものを感じない訳には行かなかつた。

この表忠碑の後には確か両国劇場という芝居小屋の出来る筈になつていた。現に僕は震災前にも落成しない芝居小屋の煉瓦壁れんがかべを見たことを覚えている。けれども今は薄ぎたないトタン葺ぶきのバラツクの外に何も芝居小屋らしいものは見えなかつた。もつとも僕は両国の鉄橋に愛惜を持つていないうにこの煉瓦建の芝居

小屋にも格別の愛惜を持つていない。両国橋の木造だつた頃には駒止橋もこの辺に残つていた。のみならず井生村楼や二州楼という料理屋も両国橋の両側に並んでいた。それから又すし屋の与平、うなぎ屋の須崎屋、牛肉の外にも冬になると猪や猿を食わせる豊田屋、それから回向院の表門に近い横町にあつた「坊主軍鶏ぼうずしやも」こう一々数え立てて見ると、本所でも名高い食物屋は大抵この界か隈に集まつていたらしい。

## 富士見の渡し

僕等は両国橋たもとの袂たもとを左へ切れ、大川に沿つて歩いて行つた。

「百本杭」のないことは前にも書いた通りである。しかし「伊達様」は残っているかも知れない。僕はまだ幼稚園時代からこの「伊達様」の中にある和靈神社のお神樂かぐらを見物に行つたものである。なんでも母などの話によれば、女中の背中におぶさつたまま、熱心にお神樂を見ているうちに「うんこ」をしてしまつたこともあつたらしい。しかし何処を眺めても、トタンぶきのバラツクの外に「伊達様」らしい屋敷は見えなかつた。「伊達様」の庭には木犀もくせいが一本秋ごとに花を盛つていたものである。僕はその薄甘いにおいを子供心にも愛していた。あの木犀も震災の時に勿論灰になつてしまつたことであろう。

流转の相の僕を脅すのは「伊達様」の見えなかつたことばかり

ではない。僕は確かにこの近所にあつた「富士見の渡し」を思い出した。が、渡し場らしい小屋はどこにも見えない。僕は丁度道端に芋を洗つていた三十前後の男に渡し場の有無をたずねて見ることにした。しかし彼は「富士見の渡し」という名前を知つていいのは勿論、渡し場のあつたことさえ知らないらしかつた。「富士見の渡し」はこの河岸から「明治病院」の裏手に当る河岸へ通つていた。その又向う河岸は掘割になり、そこに時々どこかの家の家鴨あひるなども泳いでいたものである。僕は中学へはいつた後も或親戚を尋ねるために度々「富士見の渡し」を渡つて行つた。その親戚は三遊派の「五りん」とかいうもののお上さんだつた。僕の家へ何かの拍子に円朝の息子の出入りしたりしたのもこういう親

戚のあつたためであろう。僕はまたその家の近所に今村次郎という標札を見付け、この名高い速記者（種々の講談の）に敬意を感じたことを覚えている。――

僕は講談というものを寄席よせではほとんど聞いたことはない。僕

の知っている講釈師は先代の村井吉瓶だけである。（もつとも典山とか伯山とか或はまた伯龍とかいう新時代の芸術家は知らない訳ではない。）従つて僕は講談を知るために大抵今村次郎の速記本によつた。しかし落語は家族達と一緒に相生町の広瀬だの米沢町（日本橋区）の立花家だのへ聞きに行つたものである。殊に度々行つたのは相生町の広瀬だつた。が、どういう落語を聞いたかは生憎あいにくはつきりと覚えていない。ただ吉田国五郎の人形芝居を

見たことだけはいまだにありありと覚えている。しかも僕の見た人形芝居は大抵小幡小平次とか累かさねとかいう怪談物だった。僕は近頃大阪へ行き、久振りに文楽を見物した。けれども今日の文楽は僕の昔みた人形芝居よりも軽業じみたけれども使つていない。吉田国五郎の人形芝居は例えば清玄の庵室などでも、血だらけな清玄の幽霊は太夫の見台が二つにわれると、その中から姿を現したものである。寄席の広瀬も焼けてしまつたであろう。今村次郎氏も「明治病院」の裏手に――僕は正直に白状すれば、今村次郎氏の現存しているかどうか知らないものの一人である。

そのうちに僕は震災前と――というよりむしろ二十年前と少しも変わらないものを発見した。それは両国駅の引込線をとどめた、

三尺に足りない草土手である。僕は実際この草土手に「国亡びて山河あり」という詠嘆を感じずにはいられなかつた。しかしこの小さい草土手にこういう詠嘆を感じるのはそれ自身僕には情なかつた。

## お竹倉

僕の知人は震災のために、何人もこの界隈に斃たおれている。僕の妻の親戚などは男女九人の家族中、やつと命を全うしたのは二十前後の息子だけだつた。それも火の粉を防ぐために戸板をかざして立つていたのを旋風のために巻き上げられ、安田家の庭の池の

側へ落ちてどうかにか息を吹き返したのである。それから又僕は家へ毎日のように遊びに来た「お糸さん」という人などは命だけは助かつたものの、一時は発狂したのも同様だつた（「お糸さんは」髪の毛の薄いためにどこへも片付かずにいる人だつた。しかし髪の毛を生やすために蝙蝠こうもりの血などを頭へ塗つていた。）最後に僕の通つていた江東小学校の校長さんは両眼とも明を失つた上、前年にはたつた一人の息子を失い、震災の年には御夫婦とも焼け死んでしまつたとかいうことだつた。僕も本所に住んでいたとすれば、恐らくは矢張りこの界限に火事を避けていたことであろう。従つて又僕は勿論、僕の家族もかれ等のように非業の最期を遂げていたかも知れない。僕は高い褐色の本所会館を眺めながら

ら、こんなことを〇君と話し合つたりした。

「しかし両国橋を渡つた人は大抵助かつていたのでしよう？」

「両国橋を渡つた人はね。……それでも元町通りには高圧線の落ちたのに触れて死んだ人もあつたということですよ。」

「兎に角東京中でも被<sup>ひふく</sup>服廠<sup>くしょう</sup>跡程大勢焼け死んだところはなかつたのでしよう。」

こういう種々の悲劇のあつたのはいずれも昔の「お竹倉」の跡である。僕の知つていた頃の「お竹倉」は大体「御維新」前と変らなかつたものの、もう総武鉄道会社の敷地の中に加えられていた。僕はこの鉄道会社の社長の次男の友達だったから、みだりに人を入れなかつた「お竹倉」の中へも遊びに行つた。そこは前に

もいつたように雑木林や竹やぶのある、町中には珍しい野原だったのみならず古い橋のかかつた掘割さえ大川に通じていた。僕は時々空氣銃を肩にし、その竹やぶや雑木林の中に半日を暮したものである。どぶ板の上に育つた僕に自然の美しさを教えたものは何よりも先に「お竹倉」だつたであろう。僕は中学を卒業する前に英訳の「獵人日記」を拾い読みにしながら、何度も「お竹倉」の中の景色を——「とりかぶと」の花の咲いた數の蔭や大きい昼の月のかかつた雑木林の梢を思い出したりした。「お竹倉」は勿論その頃にはいかめしい陸軍被服廠や両国駅に変つていた。けれども震災後の今日を思えば、——「卻つて并州を望めばこれ故郷」と支那人の歌つたものも偶然ではない。

総武鉄道の工事のはじまつたのはまだ僕の小学時代だつたであらう。その以前の「お竹倉」は夜は「本所の七不思議」を思い出さずにはいられない程、もの寂しかつたのに違ひない。夜は？？？いや、昼間さえ僕は「お竹倉」の中を歩きながら、「おいてき堀」や「片葉の蘆あし」はどこかこのあたりにあるものと信じない訳には行かなかつた。現に夜学に通う途中「お竹倉」の向うにばかばやしを聞き、てつきりあれは「狸ばやし」に違ひないとと思つたことを覚えている。それはおそらく小学時代の僕一人の恐怖ではなかつたのであらう。なんでも総武鉄道の工事中にそこへかよつていた線路工夫の一人は、宵闇の中に幽靈を見、氣絶してしまつたとかいうことだつた。

## 大川端

本所会館は震災前の安田家の跡に建つたのであろう。安田家は確か花崗石を使つたルネサンス式の建築だつた。僕は椎の木などの茂つた中にこの建築の立つていたのに明治時代そのものを感じてゐる。が、セセツション式の本所会館は「牛乳デー」とかいうもののために植込みのある玄関の前に大きいポスターを掲げたり、宣伝用の自動車を並べたりしていた。僕の水泳を習いに行つた

「日本遊泳協会」は丁度、この河岸にあつたものである。僕はいつか何かの本に三代将軍家光は水泳を習いに日本橋へ出かけたと

いうことを発見し、滑稽こつけいに近い今昔の感を催さない訳には行かなかつた。しかし僕等の大川へ水泳を習いに行つたということも後世には不可解に感じられるであろう。現に今でも〇君などは「この川でも泳いだりしたものですかね」と少なからず驚嘆していた。

僕は又この河岸にも昔に変らないものを発見した。それは—  
あいにく 生憎何の木かはちょっと僕には見当もつかない。が、兎に角新芽を吹いた昔の並木の一本である。僕の覚えている柳の木は一本も今では残つてない。けれどもこの木だけは何かの拍子に火事にも焼かれずに立つてるのであろう。僕は殆どこの木の幹に手を触れてみたい誘惑を感じた。のみならずその木の根元には子供

を連れたお婆あさんが二人曇天の大川を眺めながら、花見か何かにでも来ているように稻荷<sup>いの</sup>ずしを食べて話しあつていた。

本所会館の隣にあるのは建築中の同愛病院である。高い鉄の櫓<sup>やぐら</sup>だの、何階建かのコンクリートの壁だの、殊に砂利を運ぶ人夫だけのは確かに僕を威圧するものだつた。同時にまた工業地になつた「本所の玄関」という感じを打ち込まなければ措<sup>お</sup>かないものだつた。僕は半裸体の工夫が一人汗に身体を輝かせながら、シャベルを動かしているのを見、本所全体もこの工夫のように烈しい生活をしていることを感じた。この界隈の家々の上に五月のぼりの翻<sup>ひるがえ</sup>つていたのは僕の小学時代の話である。今では——誰も五月のぼりよりは新しい日本の年中行事になつたメイ・デイを思い出すの

に違いない。

僕は昔この辺にあつた「御蔵橋」という橋を渡り、度々友綱の家の側にあつた或友達の家へ遊びに行つた。かれもまた海軍の将校になつた後、二、三年前に故人になつてゐる。しかし僕の思い出したのは必ずしもかれのことばかりではない。かれの住んでいた家のあたり、——瓦屋根かわらやねの間に樹木の見える横町のことも思い出したのである。そこは僕の住んでいた元町通りに比べると、はるかに人通りも少ければ「しもた家」も殆ど門並みだつた。

「椎の木松浦」のあつた昔は暫く問わず、「江戸の横網鶯の鳴く」と北原白秋氏の歌つた本所さえ今ではもう「歴史的大川端」に変つてしまつたという外ほかはない。如何に万法は流転するとはいえ、

こういう変化の絶え間ない都会は世界中にも珍しいであろう。

僕等はいつか工事場らしい板囲いの前に通りかかった。そこにも労働者が二、三人、せつせと槌を動かしながら、大きい花崗石を削っていた。のみならず工事中の鉄橋さえ泥濁りに濁つた大川の上へ長々と橋梁を横たえていた。僕はこの橋の名前は勿論、この橋の出来る話も聞いたことはなかつた。震災は僕等のうしろにある「富士見の渡し」を滅してしまつた。が、その代りに僕等の前には新しい鉄橋を造ろうとしている。……

「これは何という橋ですか？」

麦わら帽をかむつた労働者の一人は矢張槌を動かしたまま、ちよつと僕の顔を見上げ、存外親切に返事をした。

「これですか？　これは蔵前橋です。」

### 一銭蒸汽

僕等はそこから引き返して川蒸汽の客になるために横網の浮き桟橋へおりて行つた。昔はこの川蒸汽も一銭蒸汽と呼んだものである。今はもう賃銭も一銭ではない。しかし、五銭出しさえすれば、何区でも勝手に行かれるのである。けれども屋根のある浮き桟橋は——震災は勿論この浮き桟橋も炎にして空へ立ち昇らせたであろう。が、一見した所は明治時代に變つていない。僕等はベンチに腰をおろし、一本の巻煙草に火をつけながら、川蒸汽の来

るのを待つことにした。

「石垣にはもう苔が生えていますね。もつとも震災以来四、五年になるが、……」

僕はふとこんなことをいい、〇君のために笑われたりした。

「苔の生えるのは当たり前であります。」

大川は前にも書いたように一面に泥濁りに濁っている。それから大きい しゅんせつせん 浚泄船 （てんま） が一艘起重機をもたげた向う河岸も勿論「首尾の松」や土蔵の多い昔の「一番堀」や「二番堀」ではない。最後に川の上を通る船でも今では小蒸汽 （だるません） や達磨船 （だるません） である。五大力、高瀬船、伝馬、荷足、田舟などという大小の和船も、何時の間にか流転の力に押し流されたのであろう。僕は〇君と話しながら

「沅湘日夜東に流れて去る」という支那人の詩を思い出した。こういう大都会の中の川は沅<sup>げん</sup>湘<sup>しょう</sup>のように悠々<sup>ゆうゆう</sup>と時代を超越していることは出来ない。現世は実に大川さえ刻々に工業化しているのである。

しかしこの浮き桟橋の上に川蒸氣を待つてゐる人々は大抵大川よりも保守的である。僕は巻煙草をふかしながら、唐桟柄<sup>とうざんがら</sup>の着物を着た男や銀杏<sup>いんとう</sup>返しに結つた女を眺め、何か矛盾に近いものを感じない訳には行かなかつた。同時にまた明治時代にめぐり合つた或なつかしみに近いものを感じない訳には行かなかつた。そこへ下流から漕いで来たのは久振りに見る五大力である。艤<sup>とも</sup>の高い五大力の上には鉢巻きをした船頭が一人一丈余りの櫓を押して

いた。それからお上さんらしい女が一人御亭主に負けずに棹を差していた。こういう水上生活者の夫婦位妙に僕等にも抒情詩めいた心持ちを起させるものは少ないかも知れない。僕はこの五大力を見送りながら——そのまた五大力の上にいる四、五歳の男の子を見送りながら、幾分かかれ等の幸福を羨みたい気さえ起していた。

両国橋をくぐつて来た川蒸氣はやつと浮き桟橋へ横着けになつた。「隅田丸三十号」（？）——僕は或はこの小蒸氣に何度も前に乗つているのであろう。兎に角これも明治時代に變つていないことは確かである。川蒸氣の中は満員だつた上、立つてゐる客も少くない。僕等はやむを得ず船ばたに立ち、薄日の光に照らさ

れた両岸の景色を見て行くことにした。尤も船ばたに立つて <sup>もつと</sup>いたのは僕等二人に限つた訳ではない。僕等の前にも夏外套を着た、あご鬚の長い老人さえやはり船ばたに立つていたのである。

川蒸汽は静かに動き出した。すると大勢の客の中に忽ち「毎度御やかましうございますが」と甲高い声を出しはじめたのは絵葉書や雑誌を売る商人である。これもまた昔に變つていない。若し少しでも變つているとすれば、「何<sup>も</sup>ことも活動ばやりの世の中でござりますから」などという言葉をはさんでいることであろう。

僕はまだ小学時代からこういう商人の売つているものを一度も買つた覚えはない。が、天窓越しにかれの姿を見おろし、ふと僕の小学時代に伯母と一緒に川蒸汽に乗つたときのことを思い出し

た。

## 乗り継ぎ 「一銭蒸汽」

僕等はその時にどこへ行つたのか、兎に角伯母だけは長命寺の桜餅を一籠膝にしていた。すると男女の客が二人僕等の顔を尻目にかけながら、「何か匂いますね」「うん、糞臭いな」などと話しあじめた。長命寺の桜餅を糞臭いとは——僕は未だに生意氣にもこの二人を田舎者めと軽蔑したことを覚えている。長命寺にも震災以来一度も足を入れたことはない。それから長命寺の桜餅は——勿論今でも昔のように評判の善いことは確かである。しかし

餡や皮にあつた野趣だけはいつか失われてしまつた。……

川蒸汽は蔵前橋の下をくぐり、廻橋うまやばしへ真直に進んで行つた。

そこへ向うから僕等の乗つたのと余り変らない川蒸汽が一艘矢張り浪を蹴つて近づき出した。が、七、八間隔ててすれ違つたのを見ると、この川蒸汽の後部には甲板の上に天幕を張り、ちゃんと大川の両岸の景色を見渡せる設備も整つていた。こういう古風な川蒸汽もまた目まぐるしい時代の影響を蒙らない訳には行かないらしい。その後へ向うから走つて来たのはお客様や芸者を乗せたモオターボートである。屋根船や船宿を知つてゐる老人達は定めしこのモオターボートに苦々しい顔をすることであろう。僕は江戸趣味に隨喜するものではない。しかし僕の小学時代に大川に

浪を立てるものは「一銭蒸汽」のあるだけだった。或はその外に利根川通りの外輪船のあるだけだった。僕は渡し舟に乗る度に「一銭蒸汽」の浪の来ることを、——このうねうねした浪のため舟のゆれることを恐れたものである。しかし今日の大川の上に大小の浪を残すものは一々数えるのに耐えないであろう。

僕は船端に立つたまま、鼠色に輝いた川の上を見渡し、確か広重も描いていた河童のことを思い出した。河童は明治時代には、——少なくとも「御維新」前後には大根河岸の川にさえ出没していた。僕の母の話によれば、観世新路に住んでいた或男やもめの植木屋とかは子供のおしめを洗つて いるうちに大根河岸の川の河童に脇の下をくすぐられたということである。（観世新路に植木

屋の住んでいたことさえ僕等にはもう不思議である。）まして大川にいた河童の数は決して少なくなかったであろう。いや、必ずしも河童ばかりではない。僕の父の友人の一人は夜網を打ちに出ていたところ、何か舳みよしへ上つたのを見ると、甲羅だけでもたらいほどあるすっぽんだつたなどと話していた。僕は勿論こういう話を恐らく事実とは思っていない。けれども明治時代——或いは明治時代以前の人々はこれ等の怪物を目撃する程この町中を流れる川に詩的恐怖を持つていたのであろう。

『今ではもう河童もいないでしよう。』

『こう泥だの油だの一面に流れているのではね。——しかもこの橋の下あたりには年を取つた河童の夫婦が二匹今だに住んでいる

かも知れません。』

川蒸氣は僕等の話の中に廻橋の下へはいつて行つた。薄暗い橋の下だけは浪の色もさすがに蒼んでいた。僕は昔は渡し船へ乗ること、——いや、時には橋を渡る時さえ、磯臭い匂のしたことを思い出した。しかし今日の大川の水は何の匂も持つていてない。若し又持つているとすれば、唯泥臭い匂だけであろう。……

『あの橋は今度出来る駒形橋ですね?』

○君は生憎僕の間に答えることは出来なかつた。駒形は僕の小学時代には大抵「コマカタ」と呼んでいたものである。が、それもどうの昔に「コマガタ」と発音するようになつてしまつた。

「君は今駒形あたりほとゝぎす」を作つた遊女も或いは「コマカ

タ」と澄んだ音を「ほとゝぎす」の声に響かせたかつたかも知れない。支那人は「文章は千古の事」といった。が、文章もおのずから匂を失つてしまうことは大川の水に変らないのである。

## 柳島

僕等は川蒸汽を下りて 吾妻橋あづまばし の袂たもとへ出、そこへ来合せた円タクに乗つて柳島へ向うこととした。この吾妻橋から柳島へ至る電車道は前後に二、三度しか通つた覚えはない。まして電車の通らない前には一度も通つたことはなかつたであろう。一度も?——  
もし一度でも通つたとすれば、それは僕の小学時代に 業平橋なりひらばしか

どこかにあつた或かなり大きい寺へ葬式に行つた時だけである。

僕はその葬式の帰りに確か父に「御維新」前の本所の話をしてもらつた。父は往来の左右を見ながら「昔はここいらは原ばかりだつた」とか「何とか様の裏の田には鶴が下りたものだ」とか話していた。しかしそれ等の話の中でも最も僕を動かしたものは「御維新」前には行き倒れとか首くくりとかの死骸を早桶に入れその又早桶を葭簀<sup>よしず</sup>に包んだ上、白張りの提<sup>ちよう</sup>灯<sup>ちん</sup>を一本立てて原の中に据えて置くという話だつた。僕は草原の中に立つた白張りの提灯を想像し、何か氣味の悪い美しさを感じた。しかもかれこれ真夜中になると、その早桶のおのずからごろりところげるというに至つては——明治時代の本所はたとえ草原には乏しかつたにせよ、

恐らくはまだこのあたりに多少いわゆる「御朱引外」の面かげをとどめていたのであろう。しかし今はどこを見ても、ただ電柱やバラツクの押し合いへし合いしているだけである。僕は泥のはねかかつたタクシーの窓越しに往来を見ながら、金銭を武器にする修羅界の空気を憂鬱に感じるばかりだつた。

僕等は「橋本」の前で円タクを下り、水のどす黒い掘割伝いに亀戸の天神様に行つて見ることにした。名高い柳島の「橋本」も今は食堂に変つている。<sup>もつと</sup>尤もこの家は焼けずすんだらしい。現に古風な家の一部やあれ果てた庭なども残つている。けれどもすりガラスへ縁いろに「食堂」と書いた軒灯は少なくとも僕にははかなかつた。僕は勿論「橋本」の料理を云々する程の通人では

ない。のみならず「橋本」へ来たことさえあるかないかわからぬ位である。が、五代目菊五郎の最初の脳溢血を起したのは確かにこの「橋本」の二階だつたであろう。

掘割を隔てた妙見様も今ではもうすっかり裸になつてゐる。それから掘割に沿うた往来も——僕は中学時代に蕪村句集を読み、「君行くや柳緑に路長し」という句に出会つた時、この往来にあつた柳を思い出さずにはいられなかつた。しかし今僕等の歩いてゐるのは有田ドラツクや愛聖館の並んだせせこましいなりににぎやかな往来である。近頃私娼の多いとかいうのも恐らくはこの往来の裏あたりであろう。僕は浅草千束町にまだ私娼の多かつた頃の夜の景色を覚えてゐる。それは窓ごとに火かげのさした十二階

の聳<sup>そび</sup>えて いるため に殆<sup>ほとん</sup>ど 莊嚴な 気の するも のだつた。が、この往  
来は どちらへ抜けても ボオドレエル的 色彩などは 全然 見つから  
いのに違ひない。たといデカダンスの詩人だつたとしても、僕は  
決して こう いう町裏を 徘徊<sup>はいかい</sup>する 気には ならなかつた であらう。  
けれども 明治時代の 風刺詩人 斎藤緑雨は、十二階に 悪趣味 そのも  
のを見出している。すると 明日の詩人たちは 有田ドラツクや 愛聖  
館にもかれ等自身の『惡の花』を——或は又『善の花』を 歌い上  
げることになるかも 知れない。

## 萩寺あたり

僕は碌ろくでもないことを考えながらふと愛聖館の掲示板を見上げた。するとそこに書いてあるのは確かこういう言葉だつた。

「神様はこんなにたくさんの人間をお造りになりました。ですから人間を愛していらっしゃいます。」

産児制限論者は勿論、現世の人々はこういう言葉に微笑しない訳にはゆかないであろう。人口過剰に苦しんでいる僕等はこんなにたくさんの人間のいることを神の愛の証拠と思うことは出来ない。いや、寧むしろ全能の主の憎しみの証拠とさえ思われるであろう。しかし本所の或場末に小学生を教育している僕の旧友の言葉に依れば、少なくともその界限に住んでいる人々は子供の数の多い家ほど却かえつて暮しも楽だということである。それは又どの家の子供

も兎に角十か十一になるとそれぞれ子供なりに一日の賃金を稼いで来るからだということである。愛聖館の掲示板にこういう言葉を書いた人は或はこの事実を知らなかつたかも知れない。が、確かにこういう言葉は現世の本所の或場末に生活している人々の気持ちを代弁することになつてゐるであろう。もつと尤も子供の多い程暮しも楽だということは子供自身には仕合せかどうか、多少の疑問のあることは事実である。

それから僕等は通りがかりにちよつと萩寺を見物した。萩寺も突つかい棒はしてあるものの、幸い震災には焼けずにはんだらしい。けれども萩の四、五株しかない上、落合直文先生の石碑を前にした古池の水も渴れくなつてゐるのは哀れだつた。ただこ

の古池に臨んだ茶室だけは昔よりも一層もの寂びている。僕は萩寺の門を出ながら、昔は本所の猿江にあつた僕の家の菩提寺を思い出した。この寺には何でも司馬江漢や小林平八郎の墓の外に名高い浦里時次郎の比翼塚<sup>ひよくづか</sup>も建っていたものである。僕の司馬江漢を知つたのは勿論余り古いことではない。しかし義士の討入りの夜に両刀を揮<sup>ふる</sup>つて闘つた振り袖姿の小林平八郎は小学時代の僕などには実に英雄そのものだつた。それから浦里時次郎も、――僕はあらゆる東京人のように芝居には悪縁の深いものである。従つて矢張り小学時代から浦里時次郎を尊敬していた。（けれども正直に白状すれば、はじめて浦里時次郎を舞台の上に見物した時、僕の恋愛を感じたものは浦里よりもむしろ禿<sup>かむろ</sup>だつた。）この寺は

——慈眼寺という日蓮宗の寺は、震災よりも何年か前に染井の墓地のあたりに移転している。かれ等の墓も寺と一緒に定めし同じ土地に移転しているであろう。が、あのじめじめした猿江の墓地は未だに僕の記憶に残っている。就中なかんずく薄い水苔のついた小林平八郎の墓の前に曼珠沙華の赤々と咲いていた景色は明治時代の本所以外に見ることの出来ないものだつたかも知れない。

萩寺の先にある電柱（？）は「亀戸天神近道」というペンキ塗りの道標を示していた。僕等はその横町を曲り、待合やカフエの軒を並べた、狭苦しい往来を歩いて行つた。が、肝腎の天神様へは容易に出ることも出来なかつた。すると道ばたに女の子が一人メリンスの袂たもどるがえを翻しながら、傍若無人にゴム毬まりをついていた。

「天神様へはどう行きますか？」

「あつち。」

女の子は僕等に返事をした後、聞えよがしにこんなことをいつた。

「みんな天神様のことばかり訊くのね。」

僕はちょっと忌々しきを感じ、この如何にもこましやくれた

十ばかりの女の子を振り返った。しかし彼女は側目も振らずに

（しかも僕に見られていることをはつきり承知していながら）矢張り毬をつき続けていた。実際支那人のいつたように「変らざる者よりして之を観れば」何ごとも変らないのに違ひない。僕もまた僕の小学時代には鉄面皮にも生薬屋へ行つて「半紙を下さい」

などといったものだつた。

## 天神様

僕等は門並みの待合の間をやつと「天神様」の裏門へたどりついた。するとその門の中には夏外套を著た男きが一人、何か滔々とうとうとしゃべりながら、「お立ち合い」の人々へ小さい法律書を売りつけていた。僕はかれの雄弁に辟易へきえきせずにはいられなかつた。が、この人ごみを通りこすと、今度は背広を著た男が一人最新化學應用の目薬というものを売りつけていた。この「天神様」の裏の広場も僕の小学時代にはなかつたものである。しかし広場の出

来た後にもここにかかる見世物小屋は生き人形や「からくり」ばかりだつた。

「こつちは法律、向うは化学——ですね。」

「亀戸も科学の世界になつたのでしよう。」

僕等はこんなことを話し合いながら、久しぶりに「天神様」へお詣りに行つた。「天神様」の拝殿は仕合せにも昔に変つていな。いや、昔に変つていなのは筆塚や石の牛も同じことである。僕は僕の小学時代に古い筆を何本も筆塚へ納めたことを思い出した。(が、僕の字は何年たつても一向上達する容子はない。)それから又石の牛の額へ銭を投げてのせることに苦心したことも思い出した。こういう時に投げる銭は今のように一銭銅貨ではない。

大抵は五厘か寛永通宝である。その又穴銭の中の文銭を集め、所謂「文銭の指環」ゆびわを拵えたのも何年前の流行であろう。僕等は拵殿の前へ立ち止まり、ちょっと帽をとつてお時宜じぎをした。

「太鼓橋も昔の通りですか？」

「ええ、しかしこんなに小さかつたかな。」

「子供の時に大きいと思つたものは存外あとでは小さいものですね。」

「それは太鼓橋ばかりじやないかも知れない。」

僕等はのれんをかけた掛け茶屋越しにどんより水光りのする池を見ながら、やつと短い花房を垂らした藤棚の下を歩いて行つた。この掛け茶屋や藤棚もやはり昔に変つていない。しかし木の下や

池のほとりに古人の句碑の立つて いるのは僕には何か時代錯誤を感じさせない訳には行かなかつた。江戸時代に興つた「風流」は江戸時代と一しょに滅んでしまつた。ただ 僕等の明治時代はまだどこかに二百年間の「風流」の匂いを残して いる。けれども今は目のあたりに、——〇君はにやにや笑いながら、恐らくは君自身は無意識に僕にこの矛盾を指し示した。

「カルシウム煎餅せんべいも売つていますね。」

「ああ、あの大きい句碑の前にね——それでもまだ張り子の亀の子は売つて いる。」

僕等は「天神様」の外へ出た後「船橋屋」の葛餅を食う相談した。が、本所に疎遠になつた僕には「船橋屋」も容易に見つから

なかつた。僕はやむを得ず荒物屋の前に水を撒いていたお上さんまかみさんに田舎者らしい質問をした。それから花柳病の医院の前をやつと又船橋屋へたどり着いた。船橋屋も家は新たになつたものの、大体は昔に變つていない。僕等は縁台に腰をおろし、鴨居の上にかけ並べた日本アルプスの写真を見ながら、葛餅を一盆ずつ食うことにした。

「安いものですね、十銭とは。」

○君は大いに感心していた。しかし僕の中学時代には葛餅も一盆三銭だった。僕は僕の友だちと一しょに江東梅園などへ遠足に行つた帰りに度々この葛餅を食つたものである。江東梅園も臥竜梅と一しょにとうに滅びてしまつてゐるであらう。水田や榛はんの木

のあつた亀戸はこういう梅の名所だつた為に南画らしい趣を具えていた。今は船橋屋の前も広い新開の往来の向うに二階建の商店が何軒も軒を並べてゐる。……

## 錦糸堀

僕は天神橋の袂から又円タクに乗ることにした。この界隈はどこを見ても、——僕はもう今昔の変化を云々するのにも退屈した。僕の目に触れるものは半ば出来上つた小公園である。或はトタン堀を繞らした工場である。或は又見すぼらしいバラツクである。斎藤茂吉氏は何かの機会に「ものゝ行きとどまらめやも」

と歌い上げた。しかし今日の本所は「ものゝ行き」を現していない。そこにあるものは震災のために生じた「ものゝ飛び」に近いものである。僕は昔この辺に糧秣廠りょうまつしょうのあつたことを思い出し、更にその糧秣廠に火事のあつたことを思い出し、如露亦如電という言葉は必ずしも誇張ではないことを感じた。

僕の通っていた第三中学校も鉄筋コンクリートに変っている。

僕はこの中学校へ五年の間通いつづけた。当時の校舎も震災のために灰になつてしまつたのであろう。が、僕の中学時代には鼠色のペンキを塗つた二階建の木造だった。それから校舎のまわりにはポプラアが何本かそよいでいた。（この界隈は土の瘦やせているためにポプラア以外の木は育ち悪かつたのである。）僕はそこへ

通つて いるうちに英語や数学を覚えた外にも如何に僕等人間の情け無いものであるかを経験した。こういうのは僕の先生たちや友だちの悪口をいつて いるのではない。僕等人間といううちにには勿論僕のこともはいつて いるのである。たとえば僕等は或友だちをいじめ、かれを砂の中に生き埋めにした。僕等のかれをいじめたのは格別理由のあつた訳ではない。若し又理由らしいものを挙げるとすれば、ただかれの生意氣だつた——或はかれのかれ自身を容易に曲げようとしたからである。僕はもう五、六年前、久しぶりにかれとこの話をし、この小事件もかれの心に暗い影を落しているのを感じた。かれは今揚子江の岸に相変らず孤独に暮している……

こういう僕の友だちと一しょに僕の記憶に浮んで来るのは僕等を教えた先生たちである。僕はこの「繁昌記」の中に一々そんな記憶を加えるつもりはない。けれどもただ一人この機会にスケッチしておきたいのは山田先生である。山田先生は第三中学校の剣道部というものの先生だつた。先生の剣道は封建時代の剣客に勝るとも劣らなかつたのであろう。何でも先生に学んだ一人は武徳会の大会に出、相手の小手へ竹刀を入れると、余り気合いの烈しかつたために相手の腕を一打ちに折つてしまつたとかいうことだつた。が、僕の伝えたいのは先生の剣道のことばかりではない。

先生は又食物を減じ、仙人に成る道も修行していた。のみならず明治時代にも不老不死の術に通じた、正真紛れのない仙人の住ん

でいることを確信していた。僕は不幸にも先生のように仙人に敬意を感じていはない。しかし先生の鍛錬にはいつも敬意を感じている。先生は或時博物学教室へ行き、そこにあつたコツプの昇汞しょうこ水うすいを水と思って飲み干してしまつた。それを知つた博物学の先生は驚いて医者を迎えてやつた。医者は勿論やつて来るが早いか、先生に吐剤とざいを飲ませようとした。けれども先生は吐剤じじやくを知ると、自若じじやくとしてこういう返事をした。

「山田次郎吉は六十を越しても、まだ人様のいられる前でへどを吐くほどもうろくなしませぬ。どうか車を一台お呼び下さい。」

先生は何とかいう法を行い、とうとう医者にもかからずになつた。僕はこの三、四年の間は誰からも先生の噂うわさを聞かない。あ

の面長の山田先生は或はもう列仙伝中の人々と一しょに遊んでいるのであろう。しかし僕は相変らず埃臭い空気の中に、——僕等をのせた円タクは僕のそんなことを考えているうちに江東橋を渡つて走つて行つた。

## 緑町、亀沢町

江東橋を渡つた向うもやはりバラツクばかりである。僕は円タクの窓越しに赤さびをふいたトタン屋根だのペンキ塗りの板目だのを見ながら確か明治四十三年にあつた大水のことを思い出した。今日の本所は火事には会つても、洪水には会うことはないであろ

う。が、その時の大水は僕の記憶に残っているのでは一番水嵩みずかさの高いものだつた。江東橋界隈の人々の第三中学校へ避難したのもやはりこの大水のあつた時である。僕は江東橋を越えるにも一面に漲みなぎつた泥水の中を泳いで行かなければならなかつた……。

「実際その時は大変でしたよ。尤も僕の家などは床の上へ水は来なかつたけれども。」

「では浅い所もあつたのですね？」

「緑町二丁目——かな。何でもあの辺は膝位まででしたがね。僕はSという友だちと一しょにその路地の奥にいるもう一人の友だちを見舞に行つたんです。するとSという友だちが溝の中へ落ちてしまつてね……」

「ああ、水が出ていたから、溝のあることがわからなかつたんですね。」

「ええ、——しかしSのやつは膝まで水の上に出ていたんです。それがあつという拍子に可なり深い溝だつたと見え、水の上に出来ているのは首だけになつてしまつたんでしょう。僕は思わず笑つてしまつてね。」

僕等をのせた円タクはこういう僕等の話の中に寿座の前を通り過ぎた。絵看板を掲げた寿座は余り昔と変らないらしかつた。僕の父の話によれば、この辺——二つ目通りから先は「津軽様」の屋敷だつた。「御維新」前の或年の正月、父は川向うへ年始に行き、帰りに両国橋を渡つて来ると少しも見知らない若侍が一人偶

然父と道づれになつた。彼もちゃんと大小をさし、鷹の羽の紋のついた上かみしも下しもを着てゐる。父は彼と話してゐるうちにいつか僕の家を通り過ぎてしまつた。のみならずふと気づいた時には「津軽様」の溝へ転げこんでいた。同時に又若侍はいつかどこかへ見えなくなつていた。父は泥まみれになつたまま、僕の家へ帰つて來た。何でも父の刀は鞘さや走ばしつた拍子にさかさまに溝の中に立つたということである。それから若侍に化けた狐は（父は未だにこの若侍を狐だつたと信じてゐる。）刀の光に恐れた為にやつと逃げ出したのだということである。実際狐の化けたのかどうかは僕にはどちらでも差支さしつかえない。僕は唯父の口からこういう話を聞かされる度に昔の本所の如何に寂しかつたかを想像してゐる。

僕等は亀沢町の角で円タクをおり、元町通りを両国へ歩いて行つた。菓子屋の寿徳庵は昔のように繁昌しているらしい。しかしその向うの質屋の店は安田銀行に変つていて。この質屋の「利いちやん」も僕の小学校時代の友だちだつた。僕はいつか遊び時間に僕等の家にあるものを自慢し合つたことを覚えている。僕の友だちは僕のよう年をとつた小役人の息子ばかりではない。が誰も「利いちやん」の言葉には驚嘆せずにはいられなかつた。

「僕の家の土蔵の中には大砲万右衛門の化粧廻しもある。」

大砲は僕等の小学時代に、——常陸山や梅ヶ谷の大関だつた時代に横綱を張つた相撲すもうだつた。

## 相生町

本所警察署もいつの間にかコンクリートの建物に変つてゐる。

僕の記憶にある警察署は古い赤煉瓦の建物だつた。僕はこの警察署長の息子も僕の友だちだつたのを覚えてゐる。それから警察署の隣にある蝙蝠傘屋こうもりがさやも——傘屋の木島さんは今日でも僕のこ

とを覚えていてくれるであろうか？　いや、木島さん一人ではない。僕はこの界限に住んでいた大勢の友だちを覚えてゐる。しかし僕の友だちは長い年月の流れるのにつれ、もう全然僕などとは縁のない暮らしをしているであろう。僕は四、五年前の簡阅点呼かんえつてんこに大紙屋の岡本さんと一緒になつた。僕の知つていた大紙屋は封

建時代に変りのない土蔵造りの紙屋である。その又薄暗い店の中には番頭や小僧が何人も忙しそうに歩きまわっていた。が、岡本さんの話によれば、今では店の組織も変り、海外へ紙を輸出するのにもいろいろ計画を立てて居るらしい。

「この辺もすっかり變っていますか？」

「昔からある店もありますけれども……町全体の落ち着かなさ加減はね。」

僕はその大紙屋にあつた「馬車通り」（「馬車通り」というのは四つ目あたりへ通うガタ馬車のあつた為である。）のぬかるみを思い出した。しかしながら明治時代にはそこにも大紙屋のあつたようすに封建時代の影の落ちた何軒かの「しにせ」は残つていた。

僕はこの「馬車通り」にあつた「魚善」という肴屋を覚えている。それから又樋口さんという門構えの医者を覚えている。最後にこの樋口さんの近所にピストル強盗清水定吉の住んでいたことを覚えている。明治時代もあらゆる時代のように何人かの犯罪的天才を造り出した。ピストル強盗も稻妻強盗や五寸釘の虎吉と一しょにこういう天才たちの一人だつたであろう。僕は彼が按摩あんまになつて警官の目をくらませていたり、彼の家の壁をがんどう返しにして出没を自在にしていたことに口マン趣味を感じずにはいられなかつた。これ等の犯罪的天才は大抵は小説の主人公になり、更に又所謂いわゆる壮士芝居の劇中人物になつたものである。僕はこういう壮士芝居の中に「大惡僧」とかいうものを見、一場々々の血なま

ぐさきに夜もろくく眠られなかつた。尤もこの「大惡僧」<sup>もつと</sup>は或はピストル強盜のように実在の人物ではなかつたかも知れない。

僕等はいつか埃<sup>ほこり</sup>の色をした国技館の前へ通りかかつた。国技館は丁度日光の東照宮の模型か何かを見世物にしている所らしかつた。僕の通つていた江東小学校は丁度ここに建つていたものである。現に残つてゐる大銀杏<sup>おおいちょう</sup>も江東小学校の運動場の隅に——というよりも附属幼稚園の運動場の隅に枝をのばしていた。当時の小学校の校長の震災の為に死んだことは前にも書いた通りである。が、僕はつい近頃やはり当時から在職していたT先生にお目にかかり、女生徒に裁縫<sup>さいほう</sup>を教えていた或女の先生も割下水に近い京極子爵家（？）の溝の中で死んだことを知つたりした。この先生

は着物は腐れ、体は骨になつていたものの、貯金帳だけちゃんと残つていた為にやつと誰だかわかつたそうである。T先生の話によれば、僕等を教えた先生たちは大抵は本所にはいないらしい。

僕は比留間先生に張り倒されたことを覚えている。それから宗先生に後頭部を突かれたことを覚えている。それから葉若先生に、——けれども僕の覚えているのは体罰を受けたことばかりではない。僕は又この小学校の中にいろいろの喜劇のあつたことも覚えている。殊に大島という僕の親友がちゃんと机に向つたまま、いつかうんこをしていたのは喜劇中の喜劇だつた。しかしこの大島敏夫も——花や歌を愛していた江東小学校の秀才も二十前後に故人になつてゐる……

国技館の隣に回向院えこういんのあることは大抵誰でも知っているであろう。所謂いわゆる本場所の相撲もまだ国技館の出来ない前には回向院の境内に蓆張りむしろばの小屋をかけていたものである。僕等はこの義士の打ち入り以来名高い回向院を見るために、国技館の横を曲つて行つた。が、それもここへ来る前にひそかに僕の予期していたようにすっかり昔に変つていた。

## 回向院

今日の回向院はバラツクである。如何に金の紋を打つた亞鉛葺あえんぶきの屋根は反つても、ガラス戸を立てた本堂はバラツクとい

う外は仕かたはない。僕等は読経の声を聞きながら、やはり僕には昔馴染みの鼠小僧の墓を見物に行つた。墓の前には今日でも乞食が三、四人集まつていた。がそんなことはどうでもよい。それよりも僕を驚かしたのは、おつとせい脰肭獸供養塔というものの立つていたことである。僕はぼんやりこの石碑を見上げ、何かその奥の鼠小僧の墓に同情しない訳には行かなかつた。

鼠小僧治郎太夫の墓は建札も示している通り、震災の火事にもほろびなかつた。赤い提ちようちん灯や蠟燭ろうそくや教覚速善居士の額も大体昔の通りである。尤も今は墓の石を欠かれない用心のしてあるばかりではない。墓の前の柱にちゃんと「御用のおかたはお守り石をさし上げます」と書いた、小さい紙札もはりつけてある。僕

等はこの墓を後にし、今度は又墓地の奥に――国技館の後ろにある京伝の墓を尋ねて行つた。

この墓地も僕にはなつかしかつた。僕は僕の友だちと一しょに度たびいたずらに石塔を倒し、寺男や坊さんに追いかけられたものである。<sup>もつと</sup>尤も昔は樹木も茂り、一口に墓地というよりも卵塔場という氣のしたものだつた。が、今は墓石は勿論、墓をめぐつた鉄柵にもすさまじい火の痕<sup>あと</sup>は残つてゐる。僕は「水子塚」の前を曲り、京伝の墓の前へたどり着いた。京伝の墓も京山の墓と一しょにやはり昔に變つていない。ただそれ等の墓の前に柿か何かの若木が一本、ひょろりと枝をのばしたまま、若葉を開いているのは哀れだつた。

僕等は回向院の表門を出、これもバラツクになつた坊主軍鷄ぼうずしゃもを見ながら、一つ目の橋へ歩いて行つた。僕の記憶を信ずるとすれば、この一つ目の橋のあたりは大正時代にも幾分か広重らしい興趣を持っていたものである。しかしもう今日ではどこにもそんな景色は残つていない。僕等は無残にもひろげられた跡を向う両国へ引き返しながら、偶然「泰ちゃん」の家の前を通りかかった。

「泰ちゃん」は下駄屋の息子である。僕は僕の小学時代にも作文は多少上手だつた。が、僕の作文は——というよりも僕等の作文は、大抵いわゆる美文だつた。「富士の峰白くかりがね池の面に下り、空仰げば月うるわしく、余が影法師黒し。」——これは僕の作文ではない、二、三年前に故人になつた僕の小学時代の友だ

ちの一人——清水昌彦君の作品である。「泰ちゃん」はこういう作文の中にひとり教科書のにおいのない、生きくとした口語文を作つた。それは何でも「虹」という作文の題の出た時である。僕は内心僕の作文の一番になることを信じていた。が、先生の一番にしたのは「泰ちゃん」——下駄屋「伊勢甚」の息子木村泰助君の作文だつた。「泰ちゃん」は先生の命令を受け、かれ自身の作文を朗読した。それは恐らくは誰よりも僕を動かさずにはおかなかつた。僕は勿論「泰ちゃん」のために見事に敗北を受けたことを感じた。同時に又「泰ちゃん」の描いた「虹」にありありと夕立ちの通り過ぎたのを感じた。僕を動かした文章は東西にわたつて少なくはない。しかしまず僕を動かしたのはこの「泰ちゃん」

の作文である。運命は僕を売文の徒にした。若し「泰ちゃん」も僕のようにペンを執っていたとすれば「大東京繁昌記」の読者はこの「本所両国」よりも或は数等美しい印象記を読んでいたかも知れない。けれども「泰ちゃん」はどうしているであらう? 僕は幾つも下駄の並んだ飾り窓の前にたたずんだまま、そつと店の中へ目を移した。店の中には「泰ちゃん」のお母さんらしい人が一人座っている。が、木村泰助君は生憎<sup>あいにく</sup>どこにも見えなかつた

⋮⋮⋮

## 方丈記

僕「きょう本所へ行つて来ましたよ。」

父「本所もすっかり変つたな。」

母「うちの近所はどうなつてゐるえ?」

僕「どうなつてゐるつて……釣竿屋の石井さんにうちを売つたで  
しよう。あの石井さんのあるだけですね。ああ、それから提灯ちようち  
屋やもあつた。……」

伯母「あすこに銭湯もあつたでしよう。」

僕「今でも常盤湯という銭湯はありますよ。」

伯母「常盤湯といつたかしら。」

妻「あたしのいた辺も変つたでしようね?」

僕「変らないのは石河岸だけだよ。」

妻 「あすこにあつた、大きい柳は？」

僕 「柳などは勿論焼けてしまつたさ。」

母 「お前のまだ小さかつた頃には電車も通つていなかつたんだからね。」

僕 「『榛の木馬場』あたりはかたなしですね。」

父 「あすこには葛飾北斎が住んでいたことがある。」

僕 「『割下水』もやつぱり変つてしまつましたよ。」

母 「あすこには悪御家人が沢山いてね。」

僕 「僕の覚えている時分でも何かそんな氣のする所でしたね。」

妻 「お鶴さんの家はどうなつたでしよう？」

僕 「お鶴さん？ ああ、あの藍問屋の娘さんか。」

妻「ええ、兄さんの好きだつた人。」

僕「あの家はどうだつたかな。兄さんのためにも見て来るんだつたつけ。<sup>もつと</sup>尤も前に通つたんだけれども。」

伯母「あたしは地震の年以来一度も行つたことはないんだから――行つても驚くだろうけれども。」

僕「それは驚くだけですよ。伯母さんには見当もつかないかも知れない。」

父「何しろ変りも変つたからね。そら、昔は夕がたになると、みんな門を細目にあけて往来を見ていたもんどうう？」

母「法界節や何かの帰つて来るのをね。」

伯母「あの時分は蝙蝠<sup>こうもり</sup>も沢山いたでしよう。」

僕「今は雀さえ飛んでいませんよ。僕は實際無常を感じてね。：：それでも一度行つてごらんなさい。まだずん／＼變ろうとしているから。」

妻「わたしは一度子供達に亀戸の太鼓橋を見せてやりたい。」

父「臥竜梅はもうなくなつただろうな？」

僕「ええ、あれはもうどうに……さあ、これから驚いたといふことを十五回だけ書かなければならぬ。」

妻「驚いた、驚いたと書いていれば善いのに。」（笑う）

僕「その外に何も書けるもんか、若し何か書けるとすれば……そ  
うだ。このポケット本の中にちゃんともう誰か書き尽している。」

——『玉敷きの都の中に、棟を並べ甍を争へる、尊き卑しき人の

住居は、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。……いにしへ見し人は、二三十人の中に僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。』……』

母「何だえ、それは？『お文様』のようじやないか？」

僕「これですか？　これは『方丈記』ですよ。僕などよりもちょっと偉かつた鴨の長明という人の書いた本ですよ。』



# 青空文庫情報

底本：「大東京繁昌記」毎日新聞社

1999（平成11）年5月15日

初出：「東京日々新聞」

1927（昭和2）年5月6日～22日

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2013年5月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 本所両国

## 芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>